

かけだしの頃

今だから話せるゲンバの失敗

入社してはじめて携わった仕事での出来事です。

開削工法による地下鉄建設工事の現場で、地下鉄のトンネルに付帯する換気口構造物の設計図を作図するよう命じられたのが始まりでした。

このときの換気口構造物は、地下鉄のトンネルの横から地上に向けて約10m立ち上がるもので、まず、私が構造の素案を図化し、別の設計者が詳細設計をして、数カ月後に出来上がってきた設計図をもとに、施工するという段取りでした。

失敗は、私が引いた図面にありました。本来であれば、地下鉄の換気口構造物は、トンネルの側面から地上まで垂直の壁と水平な床版でつくりまします。しかし、私は空気の通り道なので傾斜をつけたほうが良いだろうと、高いところの天井を斜めに描いてしまったのです。

そのときの私は、高等専門学校で製図の授業も受けていたし、入社後はじめて命じられた仕事でしたので、良いものを作ろうと気負いがあったのかもしれませんが。

実際に施工する段になって気付いたので、**斜め**の床板を支える支保工には角度を持った部材を用意しなければいけないし、型枠、鉄筋なども傾斜を前提に滑り落ちないよう支える工夫も必要でした。コンクリート打設でも苦労しました。

また、地下鉄の換気口は通常、人が入るところではないので、ただでさえ狭く施工しづらい場所に加え、上床版まで非常に高く、傾斜する構造物に対応する足場の設置にも大変苦労しました。

現在こそ傾斜のある構造物が多いのですが、当時「水平と垂直が基本」といわれていた現場で、「高所の傾斜構造物」は私はもちろん、下請けの方にも経験が少ない工

五洋建設株式会社
東京土木支店 土木部部长

榎見 順一

昭和45年(1970年)五洋建設株式会社に入社。以来、地下鉄をはじめ、共同溝や下水道、シールド幹線工事などを経て現在に至る。



事でした。

結局、施工に時間がかかってしまい、予定の工程には間に合いませんでした。今であれば、周りの意見を取り入れ設計に生かして作図します。この失敗は、自分の知識で判断するのではなく、いろいろな意見を取り入れることの大切さを学んだ出来事でした。

私たちの現場では、経験がものをいうとよく言われますが、それは、先輩達が「これでいいのかな」と自問自答しながら進めていった結果といえると思います。また、現場では、いろいろな人と話をするし、力を借りることになる。そうすることで、時間をかけて力がついていく。

若い人には、上司や下請けに意見を聞いてほしいと思うし、積極的な人にはいろいろな経験ができるチャンスを与えてあげたいと思っています。